

「編集工学」が拓く新たな教育の地平



橋本英人さん（編集工学研究所主任研究員）・

佐々木千佳さん（編集工学研究所イシス編集学校学林局長）に聞く

大学をはじめ中学校や高等学校でもユニークな探求型読書支援活動を展開している「編集工学研究所」。情報編集の技術を生かした大学図書館の設計も手掛けている研究所のみなさんに教育の未来を語っていただきました。

インタビュアー：CIEC 会誌編集長 横川博一（神戸大学）
CIEC 会誌編集委員 武沢護（早稲田大学大学院・高等学院）

「編集工学」って？ 情報・関係性・ハイパーリンク

横川 今日はどうぞよろしくお願いいたします。恥ずかしながら「編集工学」という分野があるということをはじめで知りました。具体的にはどういうことをされているのでしょうか。

橋本 編集工学研究所^[1]は、1987年に創立しました。当時、情報という言葉の意味が生物学、軍事、マスメディア、経営論等のジャンルごとにバラバラに使われていました。NTTが民営化されるにあたって、これらのバラバラな情報の意味を関係づけてほしいという依頼があったのを機に、所長の松岡正剛が立ち上げました。このプロジェクトはのちに『情報の歴史』という情報文化史をめぐる大年表となりました。

会社名にある「編集」という言葉は、書籍や雑誌の編集といった、いわゆる職業としての定義にとどまりません。人が言葉や身振りなどの情報を組み合わせ、新たな意味を組み立てることすべてに、編集があると捉えています。このように、誰かと会話したり、新たな企画をしたり、私たちがあらゆる情報をどうインプットしアウトプットしていくかを研究し、そのメソッドを開発してさまざまな場面に活用しようというのが「編集工学」です。

横川 いわゆる雑誌とか本を編集するという狭い意味ではないんですね。今の時代にぴったり合っている気がし

ます。

佐々木 いまは「ゲノム編集」というくらい、生命をRNAやDNAに始まる情報として捉えたり、ITやデータベースを「加工」「処理」でなく「編集」という考え方で来ています。さらに、コミュニケーションは人間関係やスキルの話、会社組織は経営論や組織論、医療は病理学や保険制度といった領域を越えて、それらを総合的に、かつ動的にとらえ、新しいソーシャル・メディアやワーク・スタイルや社会システムをつくっていくような「編集」という考え方が必要になっています。

横川 面白いですね。

橋本 人類にとっての「情報」は、最初は口頭でオーラルにやり取りしていたものが、やがて文字ができ、歴史や物語を書き言葉で伝えるようになり、本というメディアに乗って記録や伝達が行われてきたと言えると思います。15世紀を過ぎると活版印刷によって大量の書物が流通するようになり、今はインターネットによって一人一台のスマートフォンから世界中の電子情報にアクセスできるようになりました。

横川 活版印刷みたいなものが発明されたのは、やはり必然だったのですか。

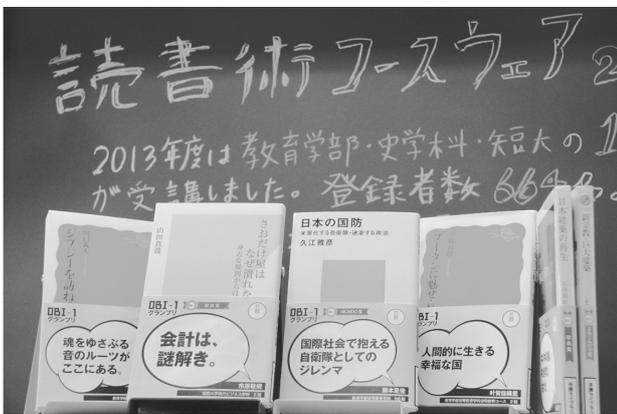
橋本 そうだと思います。常に新たな機械技術の発明や発展と共に、人間と情報の関係も変化し続けていくのだと思います。

横川 これまで口頭でやりとりしていたものが、活版印

刷ができた時、文字で読めるようになった人間は墮落すると考えられていた、なんていう話も伝わっていますが(笑)。

橋本 弊社では、帝京大学で「共読ライブラリー」^[2]を共同企画しています。一人で黙々と本を読んで内容を理解するという読み方ではなく、「メクリ」^[3]というオンラインツールを使って、読むプロセスを複数人と共有しながら紹介文を書いて帯にすることで、みんなで読み合い、薦め合い、評価し合います。本の情報を取り出して、自分なりの見方を持って他の学生とコミュニケーションをする。そういう本の活用方法を展開しています。

横川 みんな楽しみながらその関係性を学んでいくわけですね。



橋本 情報を取り出し、組み合わせて表現する「編集の型」を意識して使ってもらいます。漠然と読んだり、会話したりするのではなく、「型」を意識して、いわば「型遊び」をやっていくと、そういった情報を扱うスキルを誰もが身につけて発想や伝達に活かせるよ、ということを伝えています。

武沢 かつて、松岡さんに紹介された本でオングという学者の「声の文化と文字の文化」によると、人間はまずオーラリティからリテラシーになり、現代はまた(セカンド)オーラリティに戻ってくる。本がオーラリティの拡張としてのマルチメディア時代になっているんですね。

橋本 新しい時代になっていますよね。

武沢 編工研は「認知や学習」という点でも興味深い取り組みをされていますね。

佐々木 はい、今は小学校からICTが身近にあり、インターネットで世界に直にアクセスできる、いわゆるデジタル・ネイティブの時代です。読み書きが連動するダイナミック・リテラシーが必要であると考えています。

中学高校では「探究型読書 book-up」というプログ

ラムを通じて、本を使ってこうしたリテラシー育成を行っています。いまの子どもたちにとって情報は検索すればすぐ与えられるものです。出会ってはハイ次、ハイ次、と捨てていく。ところが、この授業では、目次を見ましょう、構造を捉えましょう、そこから自分の関心を創出する手続きへ…という具合に、本を手すりに使いながら能動的に情報を動かし、考えを前に進める方法を学んでいきます。このように取り組んでいくと、自分で考えるというのは、情報のつかまえ方、あつかい方がいままでとは違うんだというのが良く分かりました、という風に言ってくれます。

横川 そういう読み方を自然に身につける子どももいるし、できない子どももいる。そのまま大学まで来る人もいるから大学生の読書は大きな課題ですね。ただ、本を読まないのはダメだっていう発想ではなくて。

橋本 いろいろとあるツールの中のひとつという考え方で、もちろんいいと思うんです。

横川 スマホみたいなものが普及してパソコンでキーボードがあまり打てないのと同じなんです。電子媒体でいろいろな情報もあるし、読書しようと思ったら電子媒体で読めるから、本屋さんもどんどんなくなっていますね。

橋本 ハイパーテキストという考え方があります。複数の文書(テキスト)を相互に関連付け、結び付ける仕組みのことで、本こそ引用や注釈の塊で、他の著者や本とつながりあっています。松岡は「千夜千冊」というブックナビゲーションサイト^[4]を2000年から続けていますが、1冊の本を取り上げてその本の要約をしながら、その本に関する本や読んだ時の自分の感覚や感想といったものを織り込みながら書き上げています。そこでは、あくまでも本と対話していくというスタイルをとっています。松岡は、読書は打率3割だと言います。必ずしも手にとった本が、その時の自分の状況や感覚とフィットするとはかぎりません。全く太刀打ちできない本もあれば、何度も読むことになる本も、あるいは毒になる本もあるかもしれない。本や本が持つさまざまな情報と、多様に付き合っていくことを勧めています。

武沢 私がいちばん印象に残っているのは、何年前に「松丸本舗」を丸善丸の内本店に開設したときのことです。今までの本屋だとジャンルごとに本が並んでいるんですが、松丸本舗のフロアだけが違う。松岡さんの独断と偏見みたいな(笑)。非常に斬新で、ちょっとびっくりしたんですけどね。あれは非常に面白かったですね。

佐々木 書店員の方は、漫画と文庫を一緒に並べるなんて!と言いながら(笑)、並べてくださいました。本当



にいろんなジャンルを混ぜて。

横川 繋がっているんですね。

武沢 僕は理系の人間ですけど、普通、理系のコーナーに行くと理系の本しかないところに、あそこは考古学や歴史の本がいっしょに並んでいたりするわけです。

橋本 そう、ここに昆虫の本があったりとか。

武沢 無だったところに、知的好奇心をインスパイアするような空間ができていて、これは面白いなと思いました。

佐々木 松岡が作る図書空間には、「連想」を誘発し、ハイパーリンク、すなわちある構造を作りながら、本と本をリンクさせていく仕掛けがあるんです。

横川 漠然と何となく行った時に、心の扉が開かれていくのいいですね。

本の役割とは？ 対話、つながり

横川 今の大学生は昔に比べると忙しい。授業もたくさんある。昔は自分で読みたい本を買って読む時間があった。(本当は昔もいけなかったんでしょうが) 授業さばって、自分で本を読んで勉強したように思います。今もある意味、みんなマジメに勉強はしているんだけど、何か違いますね。

橋本 ある意味で良いゆるさがあったということでしょうか。

横川 高校まではそういうスタイルでもいいのかもしれないのですが、大学に入って今度社会に出て行くのにいままでと同じスタイルで勉強して、急に社会に出るっていうのは結構、残酷じゃないかと思うんですね。

橋本 おっしゃるとおりです。まさに今、世の中に確たる「正解」というのがなくなってきています。いい企業に入って出世して、将来は年功序列で安定した収入をとるというモデルも消えつつある。だからこそ、学生の頃に何をどう勉強すればいいのか、がますます重要になると思

います。自分の中の好奇心や関心、将来への期待や不安に向き合わないといけない時代になってきていると思います。いくつかの大学でセミナーを行ったときも、学生に自分が好きなことは何か、どういうことに興味があるのかとか質問しても、なかなかすぐに言葉にはできませんよね。部活でスポーツやってきたとか、料理が好きですとか、良く聞いてみると言葉にする学生もいますが、そこを深く思考して交わし合う対話の場や時間とか、向き合ってくれる大人が必要なのではないでしょうか。

武沢 やれる人は自分でやっていくんでしょけど。一定層、そういう学生はいますね。

橋本 はい。今は、インターネットで、さまざまな技術をすぐに学べます。英語も、YouTuberになる勉強も、プログラミングも、やろうと思えばいつでも情報が手に入る。一方で、どんな風に自分の人生を歩んでいきたいか、自分はどうしたいのか、大切な価値観は何か、を考えたり、対話によって違いに気づくことが、ますます重要だと思えます。そういう機会が大学の中にはまだまだ必要なのではないのでしょうか。

武沢 それはおそらく小・中・高の教育のあり方も相当影響しているかもしれません。

非常にタイトなカリキュラム、タイトなスケジュールで子どもたちが勉強に追われていますから。

橋本 そうですね。そうして結局、一人ひとりの評価は、テストの点数や偏差値で見える化されて、判断されてしまいます。その評価軸から漏れた、それぞれの見方や感性や好きなことは見えづらい。平均的にその評価軸のスコアを上げるように勉強しようとする力学が、教室や家庭の中でどうしても働いてしまいますよね。

武沢 昔は大学に入れば、ちょっといいかげんなところもあって、緩やかだったので、そこでモラトリアムみたいなことが作れたんだけど、それも無くなっちゃったということですね。

横川 だから世の中に急にいたら、生きて行くのって辛い、ということになってしまう。

橋本 本というものには、ありとあらゆる古今東西の歴史、人、不思議、そして知が入っていますよね。文章を全部読まなくても、目次にパラパラと目を通すだけでも、表紙や背表紙だけ見ても、新たな情報や言葉に出会えます。そうすると、昨日のことが思い出されたり、この本とあの本を関連づけようと思ったり、さまざまな連想が働きます。ネットで検索すると自分の検索ワードでしか基本的には出発できないので、本棚や書店があることで、そこでの連想的な思考や対話が生じることを期待したいですね。私たちは、一人一人のそういった好奇



心や関心やワクワクするものが触発される空間やプログラムを提供しようとさまざまなサービスを展開しています。

佐々木 Amazonも書店も、前に出てくるのは新刊が中心になります。でも、知のアルケオロジーといいますか、棚を見ながら知の発生や相（フェーズ）や結び目が探れ、ベースにある考え方に接点を作っていけるところが、松丸本舗の奥深さになったと思うんです。そういうリゾーム（地下茎）のようなコンテキストをもって本棚の構成をどうするかをいろいろな大学に提案させていただいています。

横川 でも今は、学生に読んでもらおうと思って紹介しても、昔の古典や、基本文献がもう絶版になっているものも多くて残念な気がします。橋本さんや佐々木さんがおっしゃる「繋がり」が得にくい世の中になってきているように思います。

橋本 そうですね。私が個人的にすごく感じていることは、話すときに共通の基盤がなくなっているなと思うんです。新聞やテレビだけでなく、大学生の内に読んでおくべき名著や古典といった、共通基盤みたいなものが昔はあった。しかし、今の若い人たちにはないんですよ。「この前YouTubeを見てこう思ったんだよ」「俺はそれ見てないわ」というようなコミュニケーションが今の若い人たちには多いと思います。多様化しているともいえますが。

武沢 高校生には読書で繋がっているコミュニティとか文化はないかもしれない。あっても、ゲームのキャラクターやお笑い、アニメとか漫画とか。

横川 そういう中でコミュニケーション能力を高めようとか、コミュニケーションしようとか、共感しあうといったようなことはとてもやりにくい時代になってきているんです。

図書館を基地とする「探究」のためのプログラム

橋本 先ほどの「探究型読書 book-up」を皮切りに、弊社では「探究型読書」という、本を活用した思考や対話の手法を展開しはじめています。「探究」というキーワードは、まさに学校教育でも重要になっていますね。

武沢 今、小・中・高でのキーワードのひとつは「探究」です。あらゆる場面において、型の学習や探求学習など。じゃあ「探究」って何？というところから授業が始まっています。

橋本 どうやってその環境を整えるかということがすごく問われていると思います。今回のテーマである読書もそのひとつ。

佐々木 探究学習と教科学習に大別し、これまでを仮に教科学習8割、探究2割だとすると、今後はこれが逆転すると言われていています。先生方は、探究学習を進めるシラバスや指導法に悩むところですが、学習環境やツールとしてやはり図書館の役割が大きくなると思います。今、中学や高校で実施している探究型読書プログラムで、連携のハブになっているのは図書館の司書教諭の方です。授業に応じた本を提供することはもちろん、探究の広がりを受け止めレファレンス対応したり、どういう本にどういう生徒が接していたかという情報をフィードバックしたり、本プログラムの教員研修会を企画したり、大変な活躍ぶりです。

佐々木 今日は高校に伺ってきたのですが、3年生の最後の授業で探究型読書を実施して下さって、それは非常におもしろかったです。直感で選んだ本を目次読書して要約し、友だちが選んだ1冊と組み合わせ、これからの自分達にむけた新しい本の企画を考える、というものです。

昨日は中学校に伺ってきました。ちょうど、本棚の前に生徒が群がっている日でした。本まみれになるというか、本棚の前に生徒たちが何冊も抱えてやってきて、とっかえひっかえしていました。これは本3冊で構成された自分の本棚をつくるワークで、それぞれの三冊棚にはタイトルやレコメンド文が付きまします。

横川 自分なりにテーマを決めて、それで本を選ぶとは。

佐々木 たとえば、ある生徒が、なんとなくアフリカに関心を持った。アフリカのどういうところに魅かれたのか、他の本と組み合わせる中で見えてくるところがポイントです。例えば、民俗学や芸術に関する本と並べると、アフリカにおける神のイメージはあらわされているかという興味が際立って、三冊棚「アフリカの神々」と

して自分の関心テーマをプレゼンする、という具合です。

横川 そういうことができるくらい、図書館には蔵書があるんですか？

佐々木 出会ってからの生徒の連想力の勝負です。猫好きの人のための本から、命って何だろうとか、クローンって何だろう、という科学本に飛ぶこともあります。歴史に関心がある生徒も、歴史を語る、戦争の歴史を保存する、といった本を並べて選んでいて感心しました。歴史オタクでひと括りに終わらせない。なぜ関心をもっているのか、本をつなぐことが、考えを深めていくことにつながります。

横川 図書室の蔵書に独自の選書を置くことで、生徒自身の中にユニークな繋がりが芽生えることを触発できそうですね。

佐々木 「科学道 100 冊」という選書プロジェクト^[5]は理化学研究所とのコラボで、多くの学校図書館に導入されています。科学者の発想を6つに分けた選書で表現しています。選ばれている本は、科学的な専門書というより、柔らかいものが多いんです。ですから、大人向けの選書ですが、中学生でも直感で選ぶことができます。

先生方にも、背伸び読書を後押ししてもらいます。たとえば、先生方自身の本の使い方を語ってもらったり、「教科書ですら情報が古くなる時代だから本を読んで自分で更新していかなくちゃいけない」というように、読書を動機づける。読解のための読書ではありません。考えるための新しい本の使い方、ということを意識づけます。

「探究型読書 book-up」は、1冊を選ぶ所からスタートして、大きく3つのステップで、問いを育てていきます。目次を読んでピックアップしたキーワードとキーワードを使って、自分で本の帯コピーをまとめるステップ1。ここは、自分なりの見方を持ち出せるようになることがねらいです。正解は求めない。ステップ2は、先ほどの三冊棚。自分の関心領域を広げてみようということで、本棚に行って本を選んでいくわけですね。司書の方にはとても喜ばれます(笑)、生徒たちがこんなに本棚に群がってくれてって。ステップ3は、新書の企画まで進みます。

武沢 優秀な司書による選書でも、スタートできそうですね。ところで、読書嫌いなというのは、小学校の読書感想文を義務にしているようなところにも原因があるんじゃないかという気がしているんですが。

佐々木 私たちも読書感想文のワークショップを小学生の親子向けにやるんですが、よくうかがう悩みは、生き



生きしたその子自身の想いのこもったことばがなく、内容を要約して最後に「面白かったです」と書いて終わるパターンがあまりに多いということ。

探究力やダイナミックな読み書きのリテラシーをつけるためには、その子なりの見方、感想のことばが出るようにはこびたい。同じ本を読んでも、読み方は人によっていろいろあっていいわけなんですよね。そういうことを先生方にお伝えして、本のどこに注目したか、連想が動いたか、自分で向き合うことを重視して下さいって始めます。

中学生の目次読書でも、本文に入ってしまうとどうしても理解しようと読んでしまいます。あえて目次だけをみて自分が注目したところは何か、自分の関心というものにまず立つこと、リーディング・セルフを立ち上げることが、欠かせないと思っています。

横川 今ご紹介いただいている「探究型読書 book-up」プログラムですと、最後の三つめのステップは、自分で本を企画するということになっていますが、こういうことは最初に伝えているのでしょうか。

佐々木 まだ実感のない新しいスキルですし、何のために何をするか、全体像を伝えます。本を読むのではなく本を使って自分の「問い」を立ち上げていくというねらいとプロセスを最初に伝えていただいて、最後は自分が世に問いたいことを本にまですることをなんとなく意識しながら一つ一つのワークをやっていきます。そうすると生徒さんは自分の連想力でしか勝負できない。自分は何に関心があるのか、三冊の組み合わせもこれと何がつながりそうかなっていうことを連想することしかすべがないんですね。それで本棚に向かいあって三冊並べてみると、そこは本が助けてくれるんです。いろんな角度から見られるものを本は持っているので、組合せを試行錯誤する中でコンテキストが立ってきて、本のテーマにしたい問いが浮かび上がってきます。

武沢 いいですね。読むのは目次だけですか。本文は？

佐々木 授業のあとで本を借りて読む子も結局増えているそうです。貸出実績が格段に伸びたと先生がグラフを見せてくださいました。

武沢 それって連想が動くからなんでしょうね。目次で立ち上がった好奇心で、中身を読んでみるっていう。無理やり読ませるわけじゃないから、目次で不思議に思ったり、ひっかかりがあるほど、ノレる、という変化が、たぶん面白いんでしょうね。

佐々木 そうですね。先生方にも、正解主義やもっともらしくやろうとする生徒には、もやもやを大事にしたり、疑問をことばにしたり、自由な連想にまかせるところを、どんどん促していただくことがいいと考えています。

武沢 入試もいままでの画一的なものから、こういった多様な教育や探究型の学習が進めばおのずから変わっていきますね。

佐々木 社会人には、専門領域ごとに求められる知識が限定されていて、なかなか変えられないところもあると思うんですが、子どもたちはある意味いろいろな領域をこえて発想していくという学際的な思考が当たり前の時代になっていきますから、やはり先ほどからお話ししている本の取り合わせというのは大事な体験だと思うんです。領域を厳密に限ってそれを深めていくことだけが学びではない。それではむしろ、社会課題の解決につながらないと、授業で先生が言われていました。

横川 こういうプログラムは先生方や生徒さんたちには好評なんですか。

佐々木 はい、やっぱり面白いですからね。連想的になることも、出来上がった三冊で自分ならではのメッセージができることも、本の力を借りるからこそできることですが、だからこそ自信になるんですよ。知をハンドリングできたという。

武沢 こういうことにどうやって生徒たちをのらせるか、課題ですね。

佐々木 はい、そうですね。私たちは、高校生向けには「クエスティーディング」と言って、本を共有しながらある共通のテーマに向かって議論を重ねていく、というようなワークショップスタイルも提供しています。こちらでも探究学習を支える授業のモデルとしてもいいのではないかと考えています。

大学生が、図書館を編集する

横川 小中高ではある程度本を読んでいるようですが、大学生になると読む量もだいぶ減るというデータがあり

ます。編工研では、近畿大学でも事業を展開されておられるようですが。

橋本 そうですね、近畿大学の場合は、「ビブリオシアター」^[6]という本棚空間をプロデュースさせていただきました。

武沢 どういうコンセプトで始まったのですか。

橋本 大学の方針である「実学」に「文理融合」を合わせたいということで、近畿大学独自の新たな本の文脈を構築しました。2階は、マンガを中心に新書・文庫によって構成された約4万冊の全く新しいインデックスを展開しています。「DONDEN」と呼んで、学生の関心が高いマンガから入って、関係する新書や文庫に手を伸ばしてもらって、知のつながりを感じ、知の奥へ向かうための、「知のどんでん返し」が起こることを目指しています。



横川 それでも、図書館というのは敷居が高くてなかなか学生の足が向かないのではないですか。

佐々木 きっかけひとつです。「DONDEN」はオープン初日から賑わいました。テーマパークに友だちときたような雰囲気です。たとえば、『宇宙兄弟』の横に宇宙に関する新書を置く、というように、漫画と新書と文庫がセットでおかれた棚から次々手にとっていました。

武沢 『宇宙兄弟』、入ってるのかあ（笑）。

橋本 『宇宙兄弟』を読んだ後は、SF作家の本や理論物理の本まで進む読み方を推奨しています。入口は漫画でいいんです。

横川 大学生も、授業などでそういったところにちゃんとリンクしてあげられるような仕組みが必要ですね。ただ、図書館で本を読みなさいではダメで。

橋本 そう思います。学生たちは本を手にするのもできなくなってきているので、本を手にする前の「テーマ」が必要になってくるんです。例えば、「仕事のやりがいは何？」とか「就活で自分をどう表現するか」とい

うテーマで学生が集まってきたときに、じゃあジョブズの本だけでなく、寺田寅彦の本を読んでごらんとか、江戸時代の本を読んでごらんとか、こういう感じですね。仕事において何を大事にしたいかというテーマを掲げておけば、本を手にとれるし、そこに自分の好奇心や関心が動くかもしれません。さらに自分は今後こういうことを考えたいという「問い」が生まれていくことが大事になります。

武沢 やっぱり高校生も大学生も「問い」ですね。はじめから自分で問いを作るのはなかなか難しいから。問いの投げかけが重要ですね。

橋本 どう「問い」を投げかけるかが大事だと思います。恋愛はどうか、家族をどうしたいとか、そういう身近なテーマが最初がいいと思います。そういう自分に関わる「問い」をこちら側から送って、興味ある生徒や学生には、実は前後左右にこんな本や人や世界があるよと誘ってあげる。そうして手にとった本を活用して、自分なりに探究していくメソッドを高校・大学生・企業人向けの「探究型読書」として展開しています。

武沢 具体的にはどのようなものでしょうか。

橋本 例えば、本の目次から「キーワード」をまず選びます。これは自分がこの本で重要だと思う言葉ですね。そこから、「ホットワード」と呼んで、自分が連想することばを10個出してみようとか、そして4つのパターンで情報に関係づけようというような情報編集のスキルを織り交ぜながら、読み進めてもらいます。

横川 面白そうですね。

橋本 読んで考えて書いて伝える、というベーシックなリテラシーというものは、実は読書のプロセスで醸成できると考えています。本の内容を理解して正解を得るといった受動的な読書スタイルではなく、自分の連想や仮説や問いを生み出すきっかけをいかに創り出すかという主体的な読書スタイルを、編集の型を扱いながら実践してもらうことが重要になります。

武沢 私は高校や大学で教えていて、「問い」を出せるような何か課題を出しても、やっぱり今の子どもたちはすぐにネットで検索してしまう。まずネット検索、そのなかでテキストを編集するっていう。

横川 コピペ&編集ですね(笑)。そこから何かが始まるといいんですけど。

佐々木 「探究型読書 book-up」の授業に取り組んでくれた中学生が昨日インタビューに答えてくれたんですけど、いつもは検索してそこから答が出てきて終わったけれど、本当はそんなもんじゃないということがよく分かりました、って言うてくれたんです。やっぱり自分が



知りたい問いというのは、もう少し深かったり、構造があったりするので、一問一答で即答できるものではないんだということがわかってくれたので嬉しかったですね。そういう意味で、学習へのむかい方が大きく変わったんじゃないかなと思います。

武沢 教員にもそういったスキルが必要ですね。編工研のような役割はますます重要になってくる気がします。

横川 今の若い人は意外とそういうクリエイティブに探究型でやることに順応性があって、結構得意かもしれませんね。

橋本 そうだと思います。

横川 武沢先生も以前に経験された「イシス編集学校」^[7]のお話も詳しく伺いたかったのですが、予定の時間も過ぎましたので、また機会をあらためてうかがえればと思います。編集工学研究所で実践されていること、その理念、どれもこれから日本が目指そうとしている教育、そして子どもたちがこれから生きていく社会や世界の方向に欠かせないものだと実感致しました。今日はどうもありがとうございました。

注)

- [1] 編集工学研究所：1987年設立、所長は松岡正剛氏。
- [2] 共読ライブラリー：帝京大学の図書館リブランディングプロジェクト。
- [3] メクリ：編集工学研究所が開発した「読書トレーニング・アプリケーション」。
- [4] 松岡正剛千夜千冊：<https://1000ya.isis.ne.jp/top/>
- [5] 科学道100冊：<https://kagakudo100.jp/>
- [6] ビブリオシアター：近畿大学独自の新たな実学的・文理融合的な文脈で本をセレクトし、約7万冊の本棚空間の企画・プロデュース。
- [7] イシス編集学校：情報編集力をトレーニングするネットスクール。2000年開校。小学生から80代まで幅広い層が同じ教室でコーチングをうける。<https://es.isis.ne.jp/>